

連合軍

と

批々

革命家とは、革命的な情セイになつた時、革命的な人間のことではなく、反動がもつともきびしく困難な時に革命的でありつづける人間のことだ。

猪中書簡集

書簡集作成にあたって

我々は、今回の事件が、決して他人ごとではなく、日本革命の内実を問う本質的な問題をはらんでいるのではないかと考えています。残念ながら、討論の材料となる報道はすべて、マスコミによって歪曲されたものですが、この困難な状況においても、我々の視点でとらえかえし、今回の事件の教訓を、革命斗争の中で、有意義なものとする必要があるのではないかでしょうか。特に獄中の戦士においては、資料不足や、討論の場が、セクトなどに限られていることから、大衆的に討論し、批判しあう場として、この書簡集を作成いたしました。獄外で活動している皆さんにとっても、討論資料として、お役に立つだろうと思います。今後も、新しい意見・反論・批判・補足など、ひき続き募集し、まとまりしだい作成していくつもりですので、どんどん、人救あてにお送り下さい。

弾圧をはねのけ前進せよ(東海禪)

団結を強め、弾圧をはねのけ前進せよ。 城崎 効

18時間に及ぶ「あさま山莊」で英雄的革命的な持久的銃戦、ながんづく、
2月28日の徹底抗战=皆攻防戦に示された英雄的五战士の献身性、大胆さ、
不屈の革命魂、革命的人道主義、確固たる決意、固い結束、規律ある美事な
行動、銃を自由に使いこなす能力etc。 総じて人民の武装=人民の軍隊の
すばらしさと日本社会主义革命戦争が到達地平を明らかにしたところの英雄
的革命的行為に驚愕した日本帝国主義ブルジョアジーは、マスコミ、「評論家」
etc.をフル動員して、至る所デッчиありと種々のフレームアップを行い、
「人質救出」なる美名の下に、皆殺し作戦を強行したのである。

ブルジョアジーは、あの強行作戦でもって、警察(特勤隊)でもまだ治守能
力があることと、権力に反逆したならば必ず漬まること、反逆の対応によつ
ては殺されても仕方がないのだということを全人民に誇示し、恫喝を行なつ
たのである。又、種々の「評論家」「御用学者」対エセ・マルクス主義者etc.をひ
っぱり出して革命戦争派の異常性、反社会性、狂人etc.のフレームアップ^oを行
い、人民と分断し、社会から抹殺せんとしたのである。同時に、反革命弾
圧の強化を正当化し、新兵器の実験の場ともしたのである。

そして今、我々革命戦争派の内部に汚点が存在したことを見つけたブルジョ
アジーは、とびあがらんばかりに狂喜し、フレームアップ^oを徹底化し、ます
ます反革命弾圧を強化しているのである。ブルジョアジーは、我々の汚点を握
ったことに狂喜し、事実を歪曲し、誇大に宣伝し、デマを流布し、プロレタ
リアートの武装の正当性を奪い取り、武装斗争の芽を残らず摘み取ってしま
おうとしているのである。我々は、ブルジョアジーのこの始鬼守陰謀を許して
はならない。我々は武装斗争路線を堅持し、その正当性を高々と掲げ、より
一層团结を固めて進まねばならない。

勿論、我々は内部に汚点があったことを隠蔽したり、うやむやにしよう等

とは思わない。我々はむしろ自らの欠点をさらけ出すである。自己の汚点をさらけ出し、自己切開し、全人民の批判を受け入れつつ、自己改造を行い、更なる飛躍を克ちとるであろう。体内の病気を隠蔽したり、自己の正当化を行ったならば、あるいは責任の一切を少數の「責任者」におしつけて病源を曖昧にし、この局面をのりきらんとするならば、人民からシッポを向かれ、必ずや失敗(完全なる)するであろうから...。我々は決してブルジョア政治委員会の如き本質の隠蔽や首のすげかえ、トカゲのしゃぼでもってごまかしをしたりするようなことはしない。我々は自己の誤りを分析し、自己切開し、病源を取り除き、だとて何年かかろうとも必ずやこれを治療しつくし、この痛苦から立ち直るであろう。

ところで今、社共(彼らの病敗ぶり、反人民性、反動性、又はブルジョアジーの補完物としての存在については周知のことであるが)は言うに及ばず、「新左翼」内部にも、ブルジョアジーのこの謀略を見抜くことができず、荒淫狂う反革命の嵐におびえ、ブルジョアジーに唱和して、連合赤軍を排斥し、武装斗争に敵対する部分が生じてきている。彼らは武斗派を排斥し、自ら武装を解除し、合法性の看板を掲げてブルジョアジーに眉へつらい、自己保身を計るとしているのである。連合赤軍内部に生じた誤りの根源を直視するではなく、盲目的に武斗路線に反発し、武斗路線を否定し、右翼日和見主義・軍事反対派として、延命を計らんとする姑息な部分が存在するのである。

一例を挙げよう。ここにちょうど、四トロの柱闇紙「世界革命」3/21号がある。中央政治局声明は言う。連合赤軍によるこの間の一切の行為(初期の段階におけるテロ行為、現金ならびに銃器類の強奪、山岳地域における活動拠点の設営、内部での幾多のリシテ殺人、あさま山莊における「籠城」、逮捕後の虐宮に対する自供等)は、その行為の破滅した性格のゆえに、全アジアならびに極東アジアにおける帝國主義支配の解体打倒をめざす被抑圧諸人民の解放

斗争に対する重大な敵対行為であり、かつ敵権力に対する挑発・利敵行為である。>

何という破廉恥、何という堕落であることよ! これが「革命的」と自称する党派の弁であるとは....。なんと「日本共产党」という立派有名前のところと似ていることよ! これがIRA(アイルランド共和国軍)の武装斗争(銃戦、爆弾テロ、Geld 徹収、武器奪取 etc)を支持すると言ったり、あるいは、アルゼンチンERP(人民革命軍)の武装ゲリラ戦、金融株券じゅくせん etc. を支持する云々と公言していた「世界革命」紙の論調なのだ。

我々は自分達の行為の全てが正しい等とは決して言わない。我々革命派は未だ生れたばかりであり、確固としたものではないが故に、幾多の誤りを犯しながら成長していくだろうことは自覚している。それ故、自らが犯した誤りに対しては人民に責任をもって答えるであろうし、批判に対しても答えてゆくだろう。だが、武装斗争に敵対し、武斗派を排除し、武装斗争を否定せんとする者に対しては断固として斗争ねばならない。それが「まじめな」日和見主義であれば余計に....。

彼らの論理は、インドシナ三国人民を最先峰とする全世界プロレタリア人民の(民族解放)社会主义革命战争に連帯し、同質の斗争を日本にもちこみ、斗い抜かんとする者に対する敵対行為であり、人民の武装を解除し、ズブズブの合法主義へと陥るものである。このように、その時の目前の利益のために重大な主要觀點を忘れてること、このように後日の結果を考慮せずに一時の成功を求めるなど、このように運動の現在のために運動の未来を犠牲にすることは、まじめな氣持でなされてはいるかもしれないが、やはり日和見主義であるし、またつねにさうであろう。そしてまじめな日和見主義こそ、おそらく全ての日和見主義のうちで最も危険なのである。(國家と革命)

四トロの諸君よ、そして全ての同志達、決して我々は武装斗争を放棄して

ささやかな私的見解 鈴木 保(中野)

厚い誠實をへだてながらも、人間解放を實現すべく斗い抜いている同志諸君に対して、連合赤軍事件についての「ささやかな私的見解を送りたいと思います。

日本階級斗争が69-71年の苦斗から、いよいよ内乱一内戦の端緒をつぐみ誰一人となく、革命か反革命かが向かれ、自己の全生活の貫徹が、軍事的=暴力的にならざるを得ない今日、我々の思想は一点の曖昧さもなく、その全体系と基盤が無慈悲に試練にかけられています。小ブル思想、日和見、敗北、排外主義にまみれているものは、このドラスティックな時代では反革倫に転落するか、よくても体制内的左翼^再に転落する以外にない。日帝のアジア侵略は沖縄返還政策のペテンに全体制の重みをかけて、その破局を暴力的に突破しようとするものである以上、我々帝国主义本国人民は、これを内乱に転化することをもって応えることを任務とせねばならない。内乱の時代は根底から、その人間の思想、生き方、人間性を問う。内乱は非妥協的であり、中間主義をはじめとし、ギリギリとした緊張の中で人間の一切を問う。一切を向うからこそ、内乱は人間解放への必然過程だ。我々帝国主义的人間は、内乱の鉄火を経る中で自己の腐敗した体質を払拭する。そして内乱を経る中で我々は奪われた一切のものを奪還する。真実の人間を！

さて、連合赤軍事件——あさま山荘銃撃戦、集団屠戮事件——について展開をしてみたいと思います。

まず第一に銃撃戦の評価について：都市を追われ、山岳アジトを根拠地としての軍事訓練等を行なっていたけれども、それも発見されてしまい、仕掛けられた斗いとして展開されたわけであり、ゲリラ戦としては敗北的因素がはじめからあった。しかし彼らは兵士としての訓練の点では非常に発達して

はならない。失敗を恐れる余りに武装斗争を否定したり、ブルジョアジーの反革命キャンペーンに唱和したりするようなことはやめよう。権力の卑劣な反革命宣伝を真に受けて、自ら武装解除することほどこつけいなものはないであろう。それは「涙を流さんとして、赤子まで流してしまう」行為でしかないのだ。ウソの見本のような警察発表をうのみにしたり、それに輪をかけたようなマスコミの論調や「評論家」どもの言葉を信じこむような馬鹿げたおめでたさを發揮してはならない。ブルジョアジーの差しかつ愚劣な論調を信じこみ、彼らに唱和することこそ、反革命剝離行為なのだ。

我々は怖れることなく武装斗争路線を堅持し、前進しなければならない。プロレタリアートの斗いの昂揚が、その対極にブルジョアジーの密集した反革命を生み出すのだということ、我々はそれとの斗いの中で鍛えられてゆくのだということを、いま一度確認しようではないか。我々はブルジョアジーのあらゆるキャンペーンやフレームアップの本質を見抜き、これをはねのけて、日本社会主义革命戦争を發展させてゆかねばならないのである。

- 内部の誤りを正し、团结を強め、ブルジョアジーのあらゆる姑息な策動を粉碎しよう！
- 反革命弾圧＝治安強化を許すな！
- 団結を強め、武斗路線を高々と掲げ前進せねばならない！
- 日和見主義的自己延命策動を許すな！
- 「六全抗」の再来を許してはならない！
- 世界革命戦勝利！
- 銃撃戦断固支持！
- ナシストピッグに死を！

【注：別に四つの諸君にうらみがあったわけでも何でもないが、たまたま手元に「世界革命紙」があったから批判させてもらった事を断りつておきます。】

あり、常に冷静であり、内部の様子を表わさなかつたということ、そしてケーラ戦の鉄則である指揮官を殲滅したという点において評価できる。又、眞の意味での死を賭した斗いは、全ての人民に衝撃を与えたを得なかつたし、とりわけ日本階級斗争に左翼から目的意識的に銃が使われたことは新しい段階をなすように思う。

オニに組織問題について：連合赤軍は軍事力学的側面のみの「野合」であるから党としての組織論は皆無に等しい。赤軍派と京浜安保共斗には戦略的一致がなく、また深く追求することなく、ただ軍事によって結合しただけで、組織を維持するために軍事的エスカレートのみが行なわれたのではないか。レーニン主義的組織論に単純反発して、党建設を完全放棄している。それを故に連合赤軍の一人ひとりも同志的連帯と意志一致(これらは党活動を媒介にしてのみ獲得される)がなく、非合法地下活動において同志さえも信じられなくなってしまったのではないか。同時に、レーニン主義的中央集権制がなく、かわりに軍事的中央集権制(これを自体は党指導を媒介にすれば全く正しい)のみで一切が決定されたのであり、ああいう結果になったのであるまいか。

もちろん、連合赤軍の肃清は「スリーリン肃清」とは本質的に違うと思う。スターリン主義の官僚的中央集権制は世界革命の放棄に基づく自己保身的なレーニン主義の歪曲形態であり、肃清は確固とした政治路線(一国社会主义論、官僚制 etc.)に基づく反革命としてある。連合赤軍の肃清はもとと單純的理由(逃亡する、アジトがばれてしまう、意志が弱い、ヘマをやった、ブルジョア的行動をした)によるものであり、追いつめられた人間の異常心理状態によるものではないかと思う。

結論的にいふと、人間解放をめざす共产主义的人間の結集体としての党組織論の欠如と、それによる同志的一体性(プロレタリアの人間関係)の崩壊が原因であり、その意味で我々は大衆から期待され、信頼される強固なレーニン主義的ボルシェヴィキ党を建設していくなければならない。

オニに、戦略・戦術の問題について：戦略は、世界同時革命論と毛沢東一国社会主义論の野合であり、組織としての戦略理論が欠如しているのが一番問題である。又、大衆運動から全く逃亡的であり、銃から革命が生まれるという様な少数者だけによる蜂起で大衆が革命に何うと思い込んでいる。であるから、革命については語るが、それを保障する、民衆の気分を全く無視している。現在的にいうならば、それは、アジア侵略阻止、沖縄返還政策粉碎、自衛隊沖縄派兵阻止であり、釣魚台列島略奪阻止斗争である。沖縄入管・諸斗争の激化が日本階級斗争の内乱・内戦的死斗を保障する斗いである。

- 以上より、我々の教訓化すべきことをあげてみると、
 - ・軍事は無条件に政治に従属せねばならない。正しい路線によってのみ軍事的にも勝利しうる。(軍事は政治の継続である)
 - ・反帝・反資本世界革命戦略に基づく鉄のレーニン主義的ボルシェヴィキ党を建設せよ。
 - ・組織問題に関する日和見主義は組織の病歎につながる。
 - ・党としての斗いと党のための斗いの有機的統一を獲得せよ。
 - ・眞の同志的連帯・思想的同一性は党活動を媒介にしたプロレタリア的人間関係の目的意識的追求によって獲得される。
 - ・大衆をトコトン革命党に結集させよ。大衆を組織し指導せよ。

我々は今回の連合赤軍事件が及ぼした影響については決して軽視はできないが、しかし我々の立場は能くまでも日本革命勝利・人間解放でなければならない。つまり、マスコミや権力の操作に動搖することなく、何が真実なのか、何が原因なのか、何が間違っていたのか等々革命主体一実践者として検討してゆかねばならない。現在的には、破防法的、フレームアップ的、K=K連合的大弾圧と関係して分析し、内乱・内戦が不可避的なものとしてある現在に見る反革命側の攻撃としてこの事件が利用されていることをとらえねばならないだろう。すなわち、この事件を評論家の立場ではなく、革命勝利

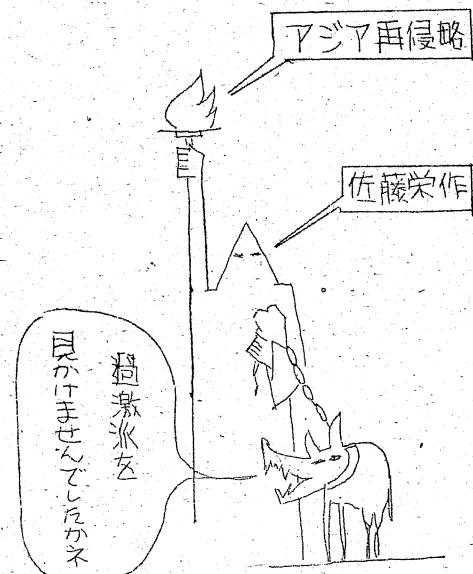
のステップとして受け取るべきだと思う。そうすることが、連合赤軍の一人ひとり(リンチされた人も含めて)に対する我々=革命を実践する者の礼儀ではないだろうか。

1972. 3. 26

中野刑務所にて

追伸

この論文は獄外にある同志その他の意見を参考にして自分なりにまとめたものである。



事実を直視すること

Y.H. (中野)

前略、獄中にいる者は、聞いながら逃げ去ることはできない。自己の存在そのものが日本の共産主義運動の一呼吸一呼吸を自らの心臓の鼓動として感じ取らねばならない。あの目をそむけたくなるようよりリンチ殺人も吐き気を感じながら見つめていなければならない。それを自らの問題として肉い直すことなしにいたなる解決も与えられないこととして。だが連合赤軍一銃撃戦とリンチ殺人は、それに前后して生じた自衛隊の立川基地への強行移駐、沖縄への秘密荷物輸送とを考え合わせてみれば決して特徴的なものではなく、むしろ両者はメタルの裏表ではなく崩壊過程にある資本主義社会の矛盾の右と左の突出した両極性を示しているのだ。それ故あの事件は、明らかに新左翼の内部に紛んでいた矛盾を直接的にむき出しに現わしているものはない。そしてまた虚飾に色づられた現実というものが我々にどうて“吐き気”としてしか感ひられない時、その現実をこそあらゆる憎しみをもって打破しなければならないのだ。

闇いの退潮期にあって、人々は疲弊し渴きそしてさぬ切っている。絶望と焦立ちと精神の荒廃の進行は新左翼の中にあったロマンティシズムのニヒリズムへの転換過程の中で醸成されていく。ある者が連合赤軍のリンチ殺人にのいて述べている。「彼らの心は荒廃していた。仲間を殺しきさらに墮落した。けれど今の世の中と同じ様な荒廃はほくらの心の片端からなくならないのではないでしょうな。彼らの精神と余りにも重なり合う自分の精神に感心を感心した者は少なくないだろう。彼らの山中での死の狂宴と斗いの方向性を見失い隊列なり去って行った者が大都会の重苦しさの中で屈辱的日常性を痛いられている生活との不連續性は背中合わせの連續性であり、同じ精神の線癡を分け持っているのだ。それは春の光の中で巨大なビルの部屋の片隅での事務仕事の最中、突然窓に見る自らの心情の荒廃が自らの尻を現出させその隣自分の部屋の扉の後ろに殺された者達と並んでいる自らの墓地を発見する日常性における死の構造なのだ。我々の死は全て違うなっている。冷氣の中で身をよじらせて死んでゆく者達と議事堂を見下す三十階建の強制収容所の中で作られた空気を吸い、作られた靴でものを見ている人々とは絶望と空虚さをはさんだサンドイッチのようにくつき合っている。一方は权力に追いつめられ殺さ

他方は権力から生み出されている。日常性と絶望の構造こそ深く向ゆねばならない。絶望が死に到る病いであるとしこもそれは特殊的なものではない。都市の人々には死は至る所その深淵をのぞかせている。生ける屍としての生のみが許されている日常性の構造は殺人すら一つの遊戲の中に解消されてしまう。生も死もその意味を剥奪されている。

日常世界に貴くテロル支配一路上でアパートの密室で山奥で鉱山で工場で都市で農村で漁村で人々は何の理由もなく死んでゆく。山と積み重ねた屍を前にして「御不運なことで」などと言ってはいられない。重要なのは日常性の構造なのだ。日常性とニヒリズム、日常性とアシズムの構造こそ向むければならない。日常生活の遂行という死の行使。健全市民生活を送っている善良な市民が死ぬ時彼は明らかに殺されたのだ。日常性という怪物に。善良さという怪物に。この巧妙な支配形態、市民が自らの生活を遂行していくさえすれば崩れない体制の構造的柔軟性は政治的言語を飲み込んでしまう。

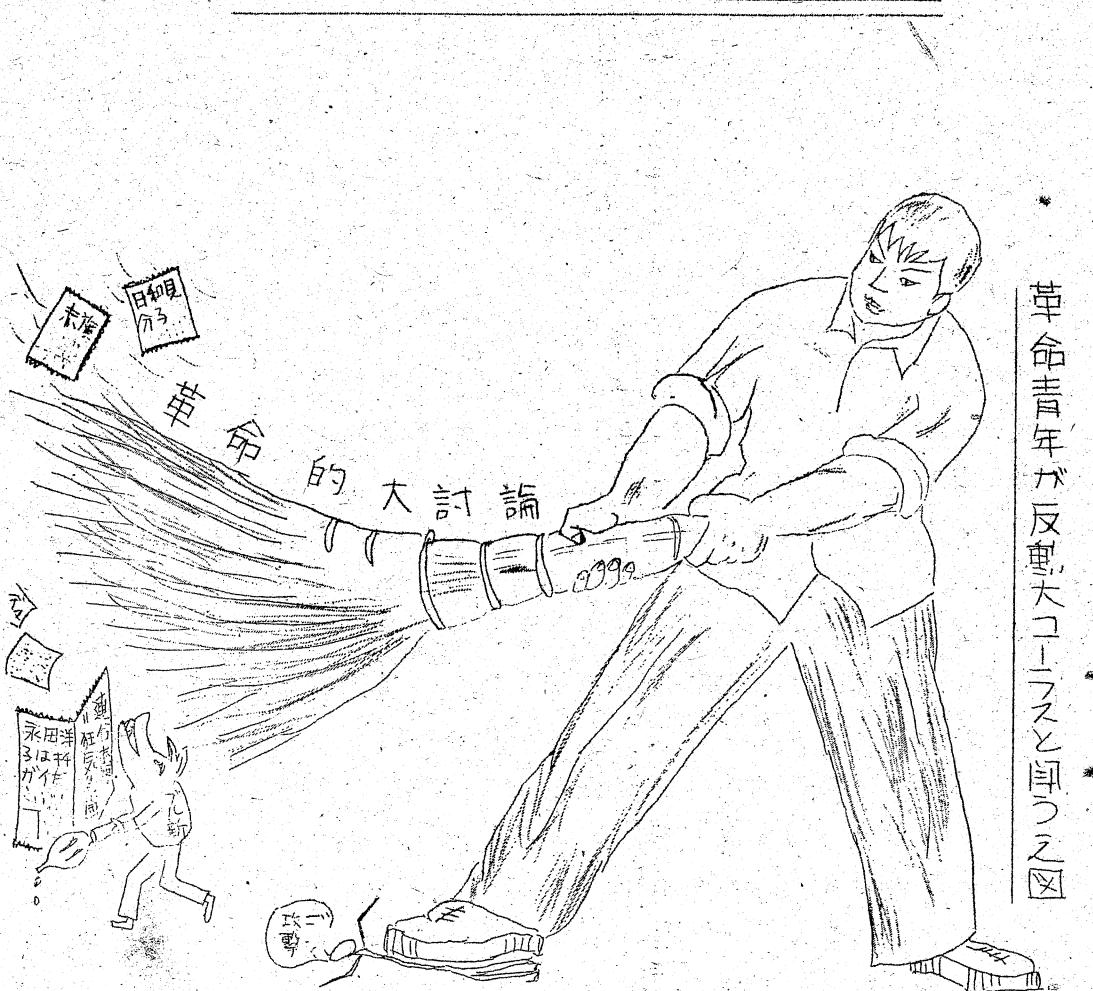
連合赤軍事件は、72年の政治状況の最も暗い闇、日本政治の暗黒の位相を浮き上からせる。「今の時代を生きていることの恐しさ」は、自らの崩壊への内的恐怖であり、人間全体の解体の過程であり、ファシズムへの外的警戒でもある。人間の自己崩壊は日常性の中で意欲を奪われた精神は、絶対的権威への絆縛へと津なる。現在の人間の精神の荒廃が一つの特殊的な立場で形成されるのではなく一般的な日常性の場において進行しているということが問題なのである。日常性という眞昼の盲目の中で至る所奴隸ははびこりこびりついでいる。この中で人は自らの死と死者とに絶えず向かい合っている。歴史の脈絡を奪われ限りなく続く「いま」「ここ」に縛りつけられ自我を喪失した者たちの革命へと羽ばたく意欲は空しくその中に埋没してゆく。日常性という湯いた砂漠の中の歩行は同質性の空白として人の精神を自立した思考を蝕んでゆく。自らの意志を欠いた彼らはマスコミの通り考え方行動してゆく。連合赤軍事件における大衆の反革命的熱狂の意味するものは何なのだろう。自らのすぐ側にひかえている深淵の闇から目をそらすのみの様に「パンとサーカス」をのみ求める。大衆の資本主義の崩壊過程への危機感はアシズムとして噴出しうる。一切は最悪の方向に向かっているということだけが鮮やかに我々の目に映じそれ以外は全く暗闇に陥らされている。

連合赤軍をスターリニズム、アシズム、唯武器主義、軍事主義、冒険主義、一徳主義と批判したとしても何の解決にもならない。問題は政治的方法論の枠内におさまらない所にあるのだ。現在の日本の状況と革命の現実性との著着の大きさこそ向むければならない。その向むきをいかにして埋めるのかを深く考え直し実践してゆく以外にはないだろう。それには戦術、戦略といったことに包摂されない革命というものへの深い直しも要請されるだろう。革命戦争は抗毒素であってそれは単に敵の毒素を排除するばかりではなく自己の汚れを洗い清める(モハラ)でもあり、同時に「革命とは人間の精神力をむさぼり食う怪物のごときものである」(トロツキー)ということなのだ。ヨイの過程の中で人は上昇と下降の高揚と渦渦の解放と抑圧の緊張の中に自らの身を投げ出し、その弁証法を体現してゆく以外はない。危機の時代、崩れゆく現状況で革命の弁証法を同時に人間の弁証法として形成してゆかねばならない。崩壊過程とはとりも直さず創造の過程でもあるのだから。

外の湯いた光の墨鏡とは、獄中の虚しい闇を浮き上がらせる。現在の困難な状況は、う者の魂に重圧を加えるものだろう。しかしそこから目をそらすことはできない。いつでも出発点は今でありここなのだ。全てを始めからやり直していこうとする努力と勇気が未来を切り開くのであり、限りなく来る今の中で永遠の開始者として階級斗争の戦略へのねばり強い把握を繰り返しながら、日本階級斗争の屈辱的歴史から諒別し、現在のヨイの困難を同時に敵支配者階級の困難性でもあるということにおいてヨイへの強い炎を燃え上らせねばならない。

リンチ殺人によるあの連日の墓壙は、新左翼の墓穴を掘っていたのだろうか。いや、そうであってはならない。連合赤軍をあそこまで追いつめた权力の弾圧は資本主義の矛盾の本質をも意味している。だがアルジョアジーの支配の最も巧妙な形態、議会制民主主義が帝国主義社会の矛盾を調節しえなくなっている現在、アシズムの危機は迫っている。70年以降ヨウ大衆の多くが戦列から脱落していった車窓こそが大衆なら孤立化した左翼を形成し、それがもう直接的に权力の弾圧の対象となつた状態を見てみるとならば連合赤軍のアシズムがプロレタリアートなきプロレタリア革命としてのノンラディカルズムから殺人にまで至ってしまったことの責任は、大衆全てに及

かってきている。より確実な大衆武装斗争が可能である歴史状況、斗争の進展が人民の間で形成されていてならば連合赤軍の犠牲はなかったであろう。革命を目指す途中に倒れた者はそれがどんな形で死んだにせよ权力によって殺された犠牲者であるのだ。歴史のはじめの一歩としての革命を阻止せんとする权力の鎮圧こそ唯一の憎悪の対象なのだ。現在の我々の任務は死者への鎮魂歌を革命の真のラブ・カリスマを求めながら擡げることであろう。革命斗争の現実的未成熟性はそれを担う我々に、それ故に死なねばならなかつた死者への贖罪への義務を課すのであり、それはまた全人民への課題でもある。彼らの額縫と没落を自らのものとして乗り越えることは全人民的革命斗争の高揚の中で始めて可能となるであろう。



虐殺は 政治・思想の軽視の結果 引き起こされた 佐藤隆信

——三湾での改編は、事実上わが軍の誕生もあり、まさにこのときから党の軍隊にたいする指導が確立したのである。もし毛沢東同志が、この根本的な問題を賛成にもま、さきに解決したのでなかつたら、その軍隊は政治の魂や明確な行動綱領を終始もちえず、ふるい型の軍隊の気風や農民の自由散漫な作風をあらためられず、その結果、たゞ強大な敵に消滅されなくとも、諸方をあらしまわる時にしかなりえなかつた。

——もし党の指導がなければ、たとえ大量の蜂起農民があり、軍事的骨幹があつたとしても、部隊はやはり魂をもたない。政治上の改造をへなければ、蜂起した農民は組織性、紀律性が欠けており、すぐつぶされてしまう。政治上の改造をへなければ、軍事的骨幹は同時に政治上の骨幹となることができず、その軍事的骨幹としての役割も發揮しえない。党は終始軍隊の指導者であり、組織者であり、激励者であり、党の指導がなければ、革命の軍隊はない。党をはじめればすべて失敗する。わが軍の全歴史はこの真理を十分に証明している。（星火燎原 — 中国人民解放軍 戦記）

上の2つの文章は全く今回の事件の原因の根源を指適していると思う。つまり革命組織（軍隊）が政治・思想を失えば堕落しきり、斗争は失敗しきりと。（我々の同志、渡辺正則同志は「序章」ア号の“南朝鮮ゲリラ戦士群像”には著者の経験から“銃火器といふものは、使用するものを必ず墮落させよ”と述べられてゐる。私自身、握ったことがないので判らないが、これを使いこなすには、高度な政治・思想が必要で、これがないと銃にふりまわされ、反革命に墮落するということだと思う。）と述べてゐる。

以上、簡単ではあるが結論である。

毛沢東は、「我々が事物を見る場合には、その実質を見るべきであり、その現象はただ、人門のための手引きとみなし、ひとたび、門内にはい、たならば、こゝの實質をつかまなければならぬ。これが

たしかな科学的な分析方法である。「事物の発展の根本原因は、事物の外部にあるのではなくて、事物の内部にあり、事物の内部の矛盾性にある。どのような事物の内部にもこうした矛盾性があり、それによって事物の運動と発展がひきおこされる。事物の内部のこの矛盾性は、事物の発展の根本原因であり、ある事物と他の事物が相互に連係し、影響しあうことは、事物の発展の第二義的原因である」と、われわれに教えている。これは今回の事件を分析する際われわれが絶対、堅持しなければならない科学的分析方法である。外の同志(今回の事件の実行者)は「解放の旗」20号(日本共産党革命左派の機關紙)で政治・思想=反米愛国路線・米帝打倒・日本軍国主義打倒の重要性を切々と呼びかけていた。しかしわれわれの同志、渡辺同志によると、これは獄中の川島同志の手紙の丸写しとの事。これは当たっていると考えられる。なぜなら、外の同志の行動は言っていることとやっている事が全く合致せず、主觀と客觀の分裂、理論と実践の遊離の結果に見られるからである。毛沢東はこの事について、「理論と実践の遊離、主觀と客觀の分裂はブルジョア階級の観念論の世界観であり、左、右知識主義路線の認識論の根源である」と教えている。

主觀と客觀の分裂、理論と実践の遊離→主觀主義
毛沢東は主觀主義について次のように述べている。主觀主義は供産党の大敵であり、労働者階級の大敵であり、人民の大敵であり、民族の大敵であり、党性が不純なことのあらわれである。主觀主義がうちたおされないかぎり、マルクス、レーニン主義の真理は勢いをえず、党性は強固にならず、革命は勝利しない。主觀主義的な指導は必然的に右知識主義か、さもなければ盲動主義の結果を生む。」と。外の同志は以上の大きな分析から、主觀主義→政治・思想=反米愛国路線の放棄→虐殺、蜂起の準備(盲動主義)、等と失敗したのであると思う。

ではなぜ主觀主義に陥ってしまったのだろうか。毛沢東は主觀主義の発生を防ぐには主として、党員の思想や党内の生活を政治的にし、

科学的にするよう党員を教育することである。と教えている。これによると、外の同志は政治・思想を重視していなかったことがわかる。これは毛沢東の教えによると、党性が不純なことを表わしている。

以上の点から、今回の虐殺、失敗、誤りの原因として、

オ1に、政治・思想の軽視(党性の不純)

オ2に、主觀主義の結果

オ3に、反米愛国路線の放棄

ではないかと思う。

四式にすると、政治・思想の軽視(党性の不純)⇒主觀主義⇒反米愛国路線の放棄⇒虐殺、一連の失敗、誤り。

以上の大まかな分析より、今回の悲劇は政治・思想の軽視の結果引き起こされたのであると思う。

今回の悲劇を再現しないためには、党性の不純(政治・思想の軽視)をなくさなければならない、つまり政治・思想を重視しなければならない。(毛沢東思想の活用) 政治オ一。

柱関車が石炭を食べてはじめて力強く走れるように

我々も毛沢東思想を身につけてはじめて前進することができる

我々が真に毛沢東思想で武装したら百戦百勝だ

我々が毛沢東思想から離れたら失敗する

毛沢東思想を堅持してこそ日本革命は勝利、前進する

日本革命の勝利は毛沢東思想を離れてはありえない
さあ同志たち

勝利の赤旗 毛沢東思想を高く掲げ 前進だ!

70年代は我々革命家の手中にある！

岡地雄一(東拘)

この間、連日新聞をにぎわせた「連合赤軍さわぎ」も下火になりマスコミの気狂いじみた反下過激派キャンペーンに日本中が踊らされた感が残る今日この頃ですが、我々、革命戦線の主体の側にあっては、むしろこれからこそ、あの一連の「事件」の総括の内容が問われていらるべきはならないと思います。言うまでもなく、今回の事件を一部の指導者の「狂氣」「殘虐」とか「異常」性などといふことによてかたづけるのではなく、現在の日本の階級情勢の中に正しく位置づけ、そこから教訓を引きだしていく以外にはなく、そのような作業を全ての同志が真剣にやりとげていくことが課題として残されてゐると思います。また連合赤軍の諸君の斗いの評価すべきところは断固として評価していかなければならぬと思います。それは、一つには「あさま山莊」銃撃戦が人民武装への一つの視点を提起したということです。彼らの不屈の革命精神はあくまでも支持されねばならず、また一部に「期待」された自決などといふ小ブル英雄主義とは無縁であり、あくまでも生き抜いて、これから先、長期にわたる苦斗を自ら選択したということは、革命戦争兵士としての気風を示すものといえるでしょう。しかし、同時に明らかにしなければならないのは、彼らの斗いをもじって、「新しい時代を切り拓いた」との評価は、少し早計に過ぎるのではないかということです。我々は、今こそ、彼らの遊ゲキ戦説の誤りを明らかにしなければならぬと同時に、現在、様々な語り口をもじて語られていく「軍事論」の再検討が求められていふのではないかと思ひます。たとえば、それは、一部の諸君が主張する帝国主義軍隊解体一打倒を革命の「正規軍」の建設によって対置するという革疎発想の行きつくところが結局は「武器論」と「軍事」の一人歩きを生みださざるをえないといふ軍事過程論、「攻防の弁証法」への批判であり、同時に日本革命において、最も有効な軍事戦略論の和諧であると考えています。これは決してクラウゼンツやボーゲンサッフやバーヨやマリゲーの軍事論

ゲリラ戦の引きうづけではなく、まずオ一に我々の武装斗争を保證する階級的基礎の形成が前提とせられ、そのような斗いを抜きにした武装斗争は自動隊との先端攻防戦の中で物理的に壊滅させられるることは必然であり、ましてや武器によるエスカレートでブルジョア軍隊と対抗しようとすること自体が、現実の階級関係を正しく認識していないことの証左であり、必然的にそれは玉砕路線が軍事空論主義への二つの道いずれかに転落するということです。あくまでも武装斗争と大衆斗争は、同時的に展開されねばならず、どちらか一方が先行するものではないということです。このような観点に立ったとき、大衆武装斗争の創出こそが、火急の任務として向われているというべきではないでしょうか。そして、我々は、この一つの例を三里塚斗争においてみるとることができます。すなはち、武器はたとえ石や竹ざおでも、こちら側の、つまり人民の側の陣地で斗っている限り、勝利は可能であるということではないでしょうか。この陣地とは、地理的なものだけでなく、先に述べた、我々の武装斗争を保證する階級的基礎ということです。いふなれば「天の利地の利、人の利」といったところです。

さて、さらには彼らの斗いにおいて評価されなければならないのは、赤軍派と京浜守株共斗が戦略論の不一致を越えて共同の軍事行動を追求せんとしたということではないでしょうか。もちろん、そのためにはあまりにも残酷な階級を生みだしてしまったことは、残念でなりませんが、少なくとも現在、新左翼諸組織が深い混迷の中にあって内ゲバに明け暮れていたとき、この連合への説明は貴重であると思います。たしかに一部には、この連合を決定的誤りであったとする意見もあるようですが、ぼくには、現在、諸々のセクトが自己目的的に「内ゲバ」を展開しているとしか考えられず、その中にあって、対立するという視点での連合は評価されるべきだと思います。なぜなら革命斗争とは、あくまでも対立斗争を前提としてしか成りたたず、現在の対立斗争を忘れた「内ゲバ」は、新左翼の悪しき体质として止揚されねばなりません。ましてや、現在

大猿の仲と評されるある二つのセクトの「死斗」(?)に至っては、权力斗争からの逃避の合理化としか考えられず、今こそ党派斗争の「別個に並んで同時に撃つ」という原則を確立すべきではないでしょうか。党派斗争を断固として斗ひ抜く、ということと、他セクトの壊滅に血道を上げるということは、あくまでも異なるのだということを全ての同志が確認する必要があると思います。このような視点に立って、今回の斗争が連合赤軍の斗争であったということを、大きく評価したいと思います。

また今回一層明らかになったことは、今さら言うまでもないことですら、日本共産党的完全なる御用政党への転落の露呈であつた、と思います。国会答弁においても、「連合赤軍とは無関係」であるといふことの表明に終始し、はては日帝政治委員会の頭目、佐藤栄作に「日本共産党はリバーナン政党であり、連合赤軍と関係がない」とは皆が知っている、もとと自信を持つがよい」(読売新聞)などと遂に、はげまされり始末である。もちろん、我々、革命戦線の側にあっても、日本共産党とはなんの関係もないことを、もとと誇りに思っているから、あいこではあるのだが、少なくとも、反帝国際主義を立場とする者は全て、今回の連合赤軍に対する权力の攻撃に対しては、断固とした態度をとらねばならず、彼らに対する弾圧は等しく革命戦線に対する弾圧として反撃をしていかねばならないことは明白である。たしかに、自民党といふしょになって「火炎噴射立法」の画策に生きがいを感じるような社会党や共産党のような人民戦線派に何かを期待するのが無理ということであるが、しかし、「新」左翼と言われる諸君の中にも今回の「事件」を「ハブル急進主義の当然の帰結」などと言つて、悟りすました顔をしている連中がいることは残念なことであると言わねばならない。それは、銃撃戦の段階で、元気よく、断固支持の声明を発したにもかかわらず、内部の「清静」が明らかになるや、とたんに沈黙を守り続けていく諸君においても同じであり、あくまでも、革命戦線の内部における誤りは誤りとして、認め、それを克服していくことが

向われていろと言わねばならない、なぜならば、最初から、なにかしら完全な戦線がつくられていなかったのではなく、多くの誤りを繰り返しながら、自らの弱さを克服していく以外には我々の道はなく、また、このようないくつかに耐えることができる者のみが革命戦士の名に値するのだから。

だが、ここにおいても残念なことに彼らの中にも自供をする者が出てきているとのことである。もちろん、商業新聞のことであるから全部を全部信用するのではないにしても、ここにもまた、一人一人の活動家の弱さが露呈してしまったように思われる。又、詳しいことがわからぬので、推断はさけるが、自首をしてくる者がいたとの報には、我々主体の側の弱さを思い知らされた気がした。少なくとも、「我々は权力に裁かれろいわれなどない」のであり、「史は必ずや我々に無罪を宣言するだろ」と確信を今一度、全ての同志諸君と確認しようではないか。我々の戦線の誤りは、何度も繰り返すが、我々の手によって克服する以外にはなく、ましてや、安っぽいハブル・センチメンタリズムなどは、ブルジョアジーの歓迎するものではあっても、革命戦線にとっては百害あって一利なしというべきであろう。今、我々には、現実を現実として、正しく認識する強い精神が向われてゐるのであり、これに耐え切れない者は、ここでと逃げ出しがちなのである。もちろん去る者を追う必要もないわけである。今や我々の斗争は一ツ一つが絶対に負けられない斗争としてあるのであり、「今日の敗北は明日の勝利」などという政治的ロマンティズムが通用しない時代なのだということを一人一人が確認しなければならない。このようすは時代にあっては、一切の日和見主義や空論主義がその破産を宣告される時代である。と共に、我々の戦線の矛盾が鋭く顕在化してくる時代でもあるだろう。しかし、どうやら、現在の戦線の混迷はここで考えていく以上に深いようである。これは現在の政府危機を今一步追いこめない我々の弱さであり、低迷であろう。まずこのことを痛苦な現実として、目をそらすことなく見つめなければならぬ。たしかに、自

民党政府の動搖は商業新聞をもつてして「長期政権にあぐらをかいだ」「トカゲのシップ切り内閣」などと言わしめるに至っている。それはまた野党においても同じであり、この間の与野党的協調政策が立川基地自衛隊強行移駐を許し、沖縄自衛隊配備を推進し、刑法改悪・保安処分を画策させていることは、誰の目にも明らかである。このよきな国内における治安維持政策による革命派の徹底的弾圧と、それを背景にした、遠くはマラッカ海峡までをも射程に収めた对外侵略の野望は、日本帝国主義の本領發揮と、皮肉なことに、それがための帝国主義者の危機の進行でもあることを思いしらせてやらねばならない。我々にとて、これは、「四次防予算」が政府修正か与党修正かなどという茶番や、沖縄へ自衛隊物資をもぐり移送せたから、「本土」へ引きあげるかあげないかなどということは、何ら本質的ではないのである。問題とするべきは、日本帝国主義の存在そのものであり、帝国主義者を「左」から援助する人民幹線派をいかに粉碎するかということである。決してそれ以外ではありえない。また見落してはならないのは、今回の連合赤軍「事件」で、あたかも一部の指導者が「精神異常者」であるかのとき、マスコミの報道である。これこそはマスコミが保守処分への道を掃き清めうばかりか、ついにその道に、ジュー・タシまでしゃべりのだとことである。このような官憲・マスコミ一体となす反革命の嵐の中に、断固として、我々革命派の旗をうちたなければならない。もはや絶対もづきたので、簡略に書くが、まずオーナーに官憲の弾圧は現在より以上に強められるであろうこと、そしてこれに対する反撃は全ての反帝国主義を立場とする者の任務であり、もはや、一步も退くことはできないということである。そして現在、三里塚では空港とのものの粉碎にむけて鉄塔が建設されといふとき。また沖縄でも「返還=日本帝国主義への組み込み」を見抜いた多くの人民が決起している。たしかに沖縄返還とは、日本帝国主義の領土獲得のことであつたし、当初から、我々はそのことを主張しつづけてきた。今、我々はこれを許すのか、許さないのか

ニフに一つが向われていふのだ。全ての同志諸君! 今こそ進撃の時である。政府危機を政府打仆へ追い込め! 70年代は我々革命家の手中にある。

獄中の同志諸君、「外」ではアパート・ローラー作戦なるものが展開されているという。人民によつて人民を監視せよ、日の丸・コニビューター・ファシズムの到来である。だが何を恐れる必要はない。勝利は我々のものである。きにるべき戦線復帰の日にそよえて、十分な休養と栄養の摂取と、そして理論的武装をなしとげておこうではないか! (反論を待つ)

参考資料の一覧

共産主義者同盟(RG)「赤報」特別号より 12月3日付

5人の連合赤軍による山荘への立てこもり、警察との銃撃戦は、日本階級闘争における最初の銃撃戦として聞かれた。(秋父事件等は経済闘争) 当初から計画されたものではなく、追いつまれての銃撃戦であったとはいえ、10日間を圧倒的に優れた敵に対して全く流石にして押し通し、徹底的に非暴力的に戦い2名の敵を殺しく1名は久松の隊長) 12名の敵に重軽傷を負わせ、日本革命戦争を大きく前進させた。

政治警察の攻撃が連合赤軍をして戦いを選ばず、戦わずして倒れるかの岐路に置いたとき、彼らは戦いを選びたった5人で(人質をとったとはいえ) 80人の警察を相手にして10日間もちこたえ1億円の金を支出させたのである。もし彼らが戦いを選ばなかつたら、連合赤軍の組織的壊滅ということだけ終り、この場合の労働者階級の意気沮喪、革命的左翼の混乱は、はるかに大きな不幸を招いたであろう。彼らが戦いを選んだからこそ、労働者階級は革命戦争の遂行のための貴重な教訓を手にすることことができたのである。

日本における革命戦争は、爆弾の使用から、さらに銃火器の使用にむかっているし、むかわなくてはならない。階級対立の非和解性

徹底的に批判し教訓化せよ

前略

牧田和美(機)

連合赤軍の件は、獄内において、唯一ブル新によつて知らされた。その反動的に歪曲された文章から、事実を知るのは困難だが、その後差し入れられた料簡紙、パンフから少量にしても眞実が得られたのは幸であった。まずオーネ彼らの行動が、権力によって、圧倒的に、マスコミキャッシュペーンにより利用されたことに気づく。テレビ、ラジオなどは知らぬが、ブル新によるその反革命報道は、権力の走狗化したそのものであった。昨年末、三里塚反対同盟青行隊にかけられた“殺人犯キャッシュペーン”より露骨になり始めたブル新の反動報道は、川・日本マルキ殺人を通じ、極に達しているといえるのではないか。過激派攻撃から新左翼＝過激派＝狂気集団とまでエスカレートした報道は権力によるローラー作戦と結びつき、都市からの新左翼総体のあぶり出し、孤立をうかがっている。彼らの自警団の権力による組織化とともに、左翼＝非人間＝犯罪者との烙印を押し、地域住民のスパイ行為の強要をもって、中核派にかけられた破防法攻撃と相重なり、恐るべき弾圧体制をかけてきている。今こそ我々の権力に対する大衆的反撃が必要とされてゐるのではないか。連合赤軍浅間山荘蜂起にしても、この事件を全く政治的なものから切りはなし、単なる狂気集団のものとキャッシュペーンをほこっている。連日のブル新・週刊誌の記事は、全くハキ氈をもよおすものである。

しかしながら、内部でのリンチ殺人事件、蜂起の敗北を冷静に見つめた場合、アロレタリアホーク・プロレタリア兵士、党なき軍のその冒險主義のあわれな帰結といふ感をまぬがれない。しかし今、我々に之て必要なのは、日共民青・革マル派諸君らのように、この事件に目をつぶり、ヒステリックに関係ないものと見なすことではなく、徹底的に批判しつくし、その銃撃戦・他でのアラスの面を、

いく分なりとも、肉体化し、教訓化することが必要なではないか。ともすれば、遠くからながめ、精神的マスター・シヨンにふけり、安易に支持する心情派的態度をいましめねばならぬであろう。これこそ、連合赤軍の戦士諸君が身をもって教えてくれたものの一つではないだろうか。最後に、殺された反革命アロフェッショナル軍・特勤隊員らには、一片の同情の余地もない！

PZIより

はますます深化しており、帝国主義者は一步一步アジア侵略、反革命戦争にむかって進み、資金奴隸としての労働者階級の愤怒はますます強まっている。この情勢の中では政治闘争の問題は革命戦争として考えられなくてはならない。

帝国主義国家権力は資本家階級が労働者階級を資金奴隸として抑圧しておくるための暴力組織であり、労働者階級はこの帝国主義国家権力を暴力革命によって粉碎、破壊打倒し、アロレタリア階級独裁権力を樹立することによって、資労効制の廃止の実現に向かなくてはならない。

(中略) — 内部問題について — すなわち、銃撃戦の遂行そのものを目的として結集した連合赤軍は、政治目的を明確化することによって意志統一して銃撃戦を行うという考え方ではなかったから、勢い「死」を抽象化して考え、銃砲を扱う個人が「共産主義化」することによって「死」の恐怖を克服した人間になりうると考えた。そして「共産主義化」の度合いをはかってゆく基準は、極端な規律厳守に求められ、個人が規律を守りうる人間になることが、個人の「共産主義化」であると考えられたのである。「共産主義化」論は革マル派の「党とは永遠の今」という観念論とは質を異にしており、党規律、軍紀に養つまるところの、非常に具体的、実践的性格をもっているのである。 — このように水平主義と個人主義とが裏返しに結合した「共産主義化」論からは、規律に不従を言ったり、この規律を守らないものは「共産主義化」でない人

差別、抑圧された人達と共に

東埜順子(東狗)

間であり、「共産主義化」できない人間であるから全ての反革命であるとして一人多くぞ斷罪されていく傾向が必ず発生する。---

問題は、なぜ次から次へと脱落者を出さざるをえなかつたのか、なぜ大量逮捕の後に完全黙呑が破られ、転向者が出ているのかというところにあり、組織防衛の観点から行なつたはずの処分が組織防衛につながっていないことがある。---

スパイ問題として宣伝されていることに関しては我々は少しの情報しか持ちあわせていないが、連合赤軍の内部肅清はむしろ動搖した者、脱落者に対する組織防衛の観点からの処分であるようだ。○作戦のような戦闘に直面しているときスパイを発見して殺すのは全く正しい。またスパイでなくとも敵との戦闘に入っている際の敵前逃亡者は銃殺しなければならない。

だが最も問題なのは「スパイをすべて殺すことではない。スパイがいても組織が防衛でき、秘密を維持でき、かつスパイを発見しうる組織」ということであり、このことは何よりも党内闘争の徹底した組織化によって様々の政治的傾向といろいろの違いを階級的観点からより分けうること、敵性論理とそうでないものとを区別しうることである。----連合赤軍は「鉄砲」を美化することによって、そもそもの非法労組組織の建設から離れて共同生活し政治的意志統一を「共産主義化」に求めたために、規律を守っていれば党内闘争は起りえないということになり、(実際は党内闘争を組織しうるという自体重要な規律問題なのだが)脱落者が組織のどのような弱点にもとづいて形成されるのかを総括する組織的保障をもちえて敵性論理を持ちこんでいる者と、そうでない者とを区別して処分し動搖する者を教育し、再び団結を固めてゆくことができなかったのである。「共産主義化」という考え方は資本主義社会という基礎の上に立って共産主義的人間関係の成立をとき、そしてその具体を規律に求めることになるのだがこのような思想は資本主義を美化している。

共産主義運動は、現に存在するマルジョアジーとプロレタリアー

今回の事件にめぐらは、言い知れぬショックを受けた一人です。入ってくるニュースが限られた、しかも権力からの一方的な不十分なものであることを前提として思うことを書いてみます。

1.世界同時革命を唱える赤軍と、毛沢東主義の京濱安保共斗の理論的な統一なしの連合軍であったこと。

2.国家権力のアパートローラー作戦などによる毒まじい弾圧の中で山岳アシトにまで追いつめられていったこと。だから、私達は街よりもます、この権力を弾劾しなければならない

3.軍事について 党を軍の中へ解消してしまうという彼らのやり方は、正規軍の確立、大衆団体の自衛武装からプロレタリア人民統武裝をなし遂げるという革命党の任務を放棄している。その為に、自ら大衆との接点を断ち切り、権力の包囲・せん滅にあってしまった。○作戦にしても大衆の中に根ざし、一人一人に訴え、村闇紙を売り、そして本当に大衆の支持を得て資金を獲得するという根本的なことを放棄したやり方だ。

以上の崩をふまえて、今回のリンチ事件をみると、現在日本には生きる、という最低限の権利さえ奪われている数多くの在日中国・朝鮮人民がいる。石川一雄氏にかけられた攻撃の如く三百万人の部落民にお苦難な差別が行なわれている。若き青年が結婚・就職と厚い差別の壁の前に、毎年命を絶つてゆく姿がまだ後きたない。多くの人民大衆が自らのキリギリの状態の中で斗争している。

私達は全人類の解放という偉大な目標を掲げて斗争している。水平社宣言の中に「人の世の冷たさが、どんなに冷たいか、人間をいたわることがなんであるかを知っている」という言葉があります。最も抑圧され、差別されて

いる人の苦しみや怒りがわからない、理解しようとしてない人間解放なんてあり得ない。彼らが本当に部族民や在日中国・朝鮮人民のことをどれだけ考えていたか、かなり疑問に思う。粗食を食べるのも兵士としての訓練だといふ言葉の中に、本当に毎日三度の食事にさえ事欠いている人々の苦しみがわかつているのか。〈もちろん私も差別者であり、抑圧者である限り、決して自らの痛苦な自己批判なしに言えたことではないが〉

追いつめられた山岳アジトの生活は、何よりもお互いの規律が必要なのは当然です。〈男女の関係、日常生活...etc.〉 けれども男の女の問題は真に人間的な問題です。それを道徳的な問題にすりかえてしまったりしてはいけない。私達は全く崩壊したブルジョア社会の中で男女の関係が歪曲されて語られている。真のあるべき姿が今の社会の中では全く歪められてしまっていることを私達の斗争の中で、男と女の真の関係を獲得・形成していくかねばならない。

お互いに明確に反革命と判断したわけでもないのに殺してしまうことは、たとえ「統括」などという言葉を使おうとも犯罪的だ。私達が反革命を抹殺するのは、深い悲しみと限りない憤りがあつてこそではないか。人を、その水も仲間を、自分の肉親を、夫を、恋人を殺すことによって(反革命でもないのに)思想性を問うなどというのは愚かな行為ではないか。決して、みせし、み、制裁であつてはならない。脱落者が出そうになれば何故もっと全力でもってオルグしないのか。何故、その人の犯罪性を追及することからやり直さないのか。人間性が全く奪われてしまっている社会だからこそ、私達は誰よりも人間性豊かでなくてはならない。(お互に寛大にせよ、という意味ではない) 彼らが、浅間山荘で本当に権力の凄まじい攻撃の中で、命を賭けて斗ったその姿を思う時、何が言ひ知れぬやしさがこみあけてくる。

権力・ブルジョアスコミは、この事件を利用して毒じいキャンペーンを繰り広げている。けれども日帝のアジア侵略は国会でも暴露されているように、

着実におし進められている。5・15が目の前に迫っている。私達はショックだ、などと悩んでいる余裕はない。勿論、今回の事は、きっちりと総括しなければいけないが、今こそもっとも前進しなければならない。

余りにも悲惨ではあったが、私達には教訓であった。今回流された14人の赤い血を決して無駄にすることなく更に大胆に進撃しなければならない。それが私達の唯一の任務だ。

現在、権力のすさまじい弾圧の中で幾人かの者が屈服しかかっている。はつきり、彼らの破滅のあらわれだが、断じて屈服することなかれ! 彼らが屈服することが、あの14人に対する回答ではない筈だ。誤まりは誤まりとして、自らが生命を賭けて革命に投じたことを忘れてはならない。私達は彼らとは思想も組織も異なるが決して彼らだけの問題ではないと思う。彼らの誤りを徹底的に批判すると共に、今後の私達の前進へのカタとしなければならない、と思う。

革命のイメージ

浜田 勝丈
(中野)

革命のイメージ

それは底抜けに明るいものだ

革命の心

それは誇りであり、誠実であり、優しさだ

われらは何をめざしているのだろう

われは榨取なき社会、階級なき社会

われらは何が欲しいのか

それは人間の解放 人間の自由

いまいちど原点に戻らなければならぬ

われらは豊太な誤りを犯している

、それは手段であるはずの革命が、いつしか目的になつてゐるという事だ。

革命至上主義——そこから心の荒廃が始まった

革命のためならば、が都合のいい言葉になった

そこから最も嫌うスター＝ズムが誕生した

ロシスの誤ちが、いまくり返される

“肅清”——ここからは何もよいものが生まれないばかりかますます悪くなる
一方だ!

我々が人民大衆はいま沈んでいる

“肅清”の悲しみにうちひしがれている

今こそ前衛は大衆の心をつかまねばならない

前衛は大衆の心と共に歩まねばならない

“肅清”が投げかけた問題

それは革命者の心だと思う

前衛よ! そのことに答えて欲しく

それが人民大衆の願いと思う

革命の心

それは誇りであり、誠実であり、優しさだ

革命のイメージ

それは底抜けに明るいものだ

「悲劇」についての若干の意見

松田 久(東拘)

獄中にあり、局外者であるというくやしさ。にも拘らず伝えられる悲劇=革命の暗黒が自分たちの無力さ無能さと스타と犬ともがあいつめた結果だという冷厳たる現実、事実。何故、僕は、そして僕たちはあれだけ多くを語りつつ、このような悲劇=革命の暗黒を未然にくいとめることはできなかったのか?

日々闘っている人にとってもはや論外と言われるかもしれない。しかし僕は自分がいつ、どこにいても「赤軍兵士」であることに誇りと責任をもつ。日本における社会主義革命戦争は長期にわたり犠牲にみち残酷な一面をもっていると看えられていた。その通りだと思う。なんでこんなことでひるもうか? 森のオヤジさんたちの革命の「生」と死んでしまった同志たちの「死」をしっかりとうげとめ、うげつがないなら、スタ供が笑う、革命がなく。

ひとびとよ、我々と同志たちの言葉にどうか耳を傾けて下さい。敗北から、悲劇から暗黒から離れないなら勝利はどこにあるでしょうか。

僕はこの悲劇が伝えられはじめたころ「銃撃戦」を「絶望の淵に咲いた仇花」と思いました。しかし絶望のなかからあのやうな銃撃戦は戦えたでしょうか? 奏さんに対するあのやうな対応、敵に対する戦い方、団結は絶望から生まれたでしょうか? 僕は彼ら五人がなによりもそこに眞の敵を見出したことによつて、真に闘うべき敵がいたことによつて、あのやうに戦い抜けたのだと思います。それが血の池に咲いたハスの花であったとしても血の森に咲いたクチナシの花であつたとしてもそれはやはりすばらしい戦いだったのです。悲劇と銃撃戦は表裏一体をなすものである。

上野勝潤兄の「赤い火をもやそう!」を読みました。断乎「異議ナシ!」です。とりわけあの「⑥フルジョワジーがにくい!!」の立場に立って自己批判と総括はすすめられねはなりません。ここでは上野兄の主張に依拠しながら僕なりの意見をのべてみたいと思います。

①悲劇の根源について

①統一赤軍の合同。醜悪なマスコミ、あるいは僕ら内部にも、思想的、理論的に異質な日共革命左派と赤軍派が無理矢理組織合同しギクシャクし合い、マナツを起したためという意見がある。確かに結果的にみると（スターリンの情報から判断するしかないが）7・15「連合赤軍」結成の段階から、年末からの統一党組織結成に到る躍進が直接的原因として矛盾を拡大したともいえる。また、俗物的競争心が動いたかも知れない。しかしそれはやはり結果論にすぎない。理論的に相違があったとしても思想的に相違していた訳ではない。思想性とはまずなによりプロレタリア階級性なのだから。階級的実践において同一ならば強固な統一戦線によって団結をかちとるべきだ。統一党組織結成の時期や具体的方法については僕には判断できない。だが団結がまちがったのではけっしてない。団結はより強固に兄弟的・同志的団結をかちとるべきであった。これも結果論的といえば、正しい政治・思想・組織・軍事路線をもってすれば、統一党組織結成は強力な武器となり、新段階を画したろうとくやまれる。とにかく、地下革命武装勢力はより強化・発展すべきです。

②森同志ら指導部に対して。上野兄に僕が唯一反対するとすれば、それは森同志の評価についてです。（しかし上野兄は⑥でそのマイマイさを克服しているので反対する意図はなくなったのですが）ところでもしこの悲劇の根源を指導的同志たちの個人的資質に求めるなら、それは最も安易な、最も醜悪な、最も眞実を裏切るものです。僕は森同志を「オヤジさん」と呼びます。森のオヤジさんは僕の最も敬愛する指導的赤軍兵士です。同志坂東についてもしかりです。僕の知る以前の過去がどうであれ、同志森は民族内院内闘争の過程で脱落したことを見抜き、ビラ書き、ステはり、オルゲ等活動家としてのイロハから再起して活動し、指導的立場に立って以降は赤軍の過去の栄光を背負い、必死になって戦い抜いたのです。すばらしい同志です。すばらしいオヤジです。マスコミによる悪意ある報道によって同志森、同志永田が次陷入間、精神病とののしら

れているがそれはとんでもないことだ。彼らがすばらしい革命兵士であつたがゆえに僕はそれでも抗し難い必然性を強烈に感ずる。同志森同志坂東らを知つていればいる程、およそ考えられない悲劇なのだ。オヤジたちは生命をかけて本当の真剣な“総括”をなじとげるだろう。日本の、世界のプロレタリア階級のために余りに悲劇的な自らの、革命の「生」と死の“総括”として残すだろう。僕はオヤジたちの革命の「生」と死んでしまった同志たちの「死」を赤軍兵士としてうけとめうけつぐ。そうでないなら自分の無力さ無能さが故にオヤジたちをそこまで追いつめたという現実に目をつむることになろう。では一体抗し難い必然性とは、根源とは何であるのか？

③都市から山岳への撤退と銃（軍事）を使いこなせなかつたことについて。悲劇の根源について考えてゆくと都市から山岳へ撤退したということが悲常に象徴的なものに思えてくる。それは敵のアパート・ローラー作戦、全国四万以上の入り込動員しての一斉ガサ入れ検問攻撃に対処しきれず防御において認められた結果である。そしてそれは組織・兵力の過度の集中を生み、アロ人民が視界に入らざる主義が極限化し、軍事技術主義、悪しき経験主義に陥り、鉄の革命規律が没階級的、唯軍隊的規律になり、敵・友・味方が見えなくなることから脱落が始まり、それを機密保持・組織防衛ということで「たえざる限りなき同志愛」を歪曲された「たえざる限りなき不信」に変えたと思える。昨年の8月に元同志二人が東京と千葉を追跡・殺害されたということを伝えられているが、それ程のことができるのに何故都市を放棄したのか、あるいはせざるをえなかったのか、僕は實に不可解だしやりきれなく思う。何故そうなったのかその直接的分析は同志森たちの総括をまつしかないと僕らは僕らなりに背後から側面から分析しなければなりません。結果的にみて（結果論にも二種ある）我々の組織主体が銃（軍事）を使いこなせなかつたと結論できる。獄中の同志たちは同様に組織主体の危機を感じていた。僕も「間われていることは前哨的アリラ戦からアリラ革命戦争への躍進か、火遊びへの墮落かである。」とは考えていた。銃を手にしてしっかり握らないなら

ばケガをするしヤケドをする。個人で手足の一本や二本失なったところで大したことないかもしれないが組織のケガ、ヤケドはなおりにくい」とは考えていた。銃を手にした時から敵との実質的な戦争状態が始まり、その緊張関係は組織内に反映する。組織内の矛盾を正しく処理するには、組織的、政治的に成熟していなければならぬ。だから根源は、政治、軍事路線の問題なのです。そのうえで規律等の組織内矛盾止場のための戦術・方針・方法を検討しなければならないのです。ここでは銃を扱いきる主体の階級的・政治的未成熟が悲劇の根源であることを指摘するにとどめておきます。

②悲劇の歴史的・階級的位置

①歴史的位置 上野兄はこの闘争を原則的に正しく指摘しています。「日帝は狂いはじめており「く反動の嵐」は増々ひどく」「政府打倒、國家権力粉碎の偉大なく権力闘争」を求めはじめている。」…闘争主体としての歴史的位置という視点からこれを見ていく。ア現代の眼。3月号に二つの印象的な文章がありました。一つは須藤久氏の「映画よお前は誰のために」、もう一つは題は忘れたが三里塚、戸村委員長の「大竹ハナの裏切り」に関するものです。映画監督須藤氏のは「歴史よお前は誰のために」と題する部落解放運動を題材にしその発展のために製作された映画を、関西ムンド主催で同志社にて上映しようとしたのを中核派が上映阻止したことに関する文章です。須藤氏にとって関西ムンドより中核派の方がずっと親しく、まるで兄弟同様の仲の友人（同志たち）が多いという。そういう兄弟たちに対してゲバ棒をふるったり、なぐりあつたりしてまで上映する気はない。しかしどうしてこんなことになるんだと自問し、中核派はじめ革命家たちに問い合わせている。紙数もないのに詳しく書けないが、ひょっとしたらありきたりの動搖なのかもしれない須藤氏の文章が妙にひっかかって思い出される。戸村さんに関してはこの大竹ハナの裏切りについて様々なところでその趣旨を発表しておられるので、改めてその内容は書きません。反対同盟にとって老闘士小川明治氏の墓あべきを先導した元婦人行動隊副隊長大竹ハナの裏切りはたえがたいものであつ

たと思う。それは単に反対同盟だけではない。日本の革命戦士たち全てにとってくやしいことだ。三里塚は去年9月の決戦で3人の犬ともを殺した。大木よねさんのようなおばらしい革命婦人を生んだ。だが一方で敵は青行列車中心に×チャメチャな逮捕、拷問を展開し、三の官道は自殺し、大竹ハナを生んだ。我々はこの公然たる変節、スペイ＝大竹ハナに対して今は無力である。（しかし戸村委員長の言うように過去6年間の闘いは未だ序の口なのだ。前途は洋々としていると考えるが）

内ゲバは多くの批判をよそにいよいよ激しさを増している。須藤氏の標榜した事件がほんのささやかなことなどといわれよう。また、読売新聞の投書欄には「私は渋谷中村刑事殺し(11.14の中核の渋谷暴動のこと)の時、学生たちを尾行して警視総監督をもらった」と自慢する一般「市民」が出てきたのである。「市民」という名の公然たるスペイたち。あの不可解きの「朝霞自衛官殺し」事件、全てが陰謀ではないとは思えるが警察組織が「清田追跡」等を大なフレームアップ体制を築いていることだけは確かだ。國際権力の謀略がうごめいている。

これら全ての極限の象徴に「連合赤軍」の悲劇が位置する。それは単に日本の革命の悲劇なのではない。アメリカ、B.P.P.の分裂があのよう悲しい事態になつていることは、全世界のとりわけ先進帝国主義国内における革命派がぶつかっている壁がひとしく共通のものであり。

その最も否定的悲劇的结果がこの悲劇なのだ。

日帝は四日市、鹿島と完全に破壊し自然と人間と工業と農業の諧和的發展など帝国主義ではありえないことを宣言されたにもかかわらず、今も「むつ小川原」「新大隅開発」の巨大コンビナート構想を進め「新全線」「全国新幹線化」「全国パイプライン結合」と人民の精神的、肉体的荒廃をもたらし、自らはスタのように悪性膨張している。日本のみではない。「韓国」、フィリピン、インドネシアの森林、林業を破壊している。それらに対する人民の怒りの反撃は様々の細流をなしているがもどかしいがそれは個々に分断され、革命主体はその怒りをストレートに激烈に表現しようとしている。日帝の悪性膨張、破壊、荒廃、反動の嵐のうずまきの中に〈革命の暗黒〉=悲劇の歴史的位置がある。

①悲劇の階級的位置 悲劇に対して、同志たちに対して、背後からものさうのはつらい。しかしいわねばならない。上野元もいうく我々は極左冒険主義であったのか／しかりと。僕たちは「武器の要素第一」でなく「人の要素第一」を訴えてきた。しかし我々は結局極左冒険主義をしかなかつたし武器の要素第一でしかなかつた。それける人の要素第一をよくわかっていないかったとか、個人的資質の問題にするわけにはいかないことなのだ。毛沢東同志やホー・チ・ミンおじさんやカストロ、ゲバラ同志たちの言う「人の要素」となんとそれは違っていたことだろう。

金日成将軍のもとヒョウんでいる9人のハイ・ジャッキー・ハイの同志たちはそれらのことをもっともいち早く徹底して学びとり総括していた。世界を具体的に学びはじめた時、自らの小スル性は明白であったのだ。H-J-Hハイがとび立った直後からの我々の第二次綱領論争は70年6月の敗北をもって挫折し閉鎖主義に傾斜し「軍の中の党、党の軍化」は結果的にはその閉鎖主義を追認する形となつた。かつて毛沢東同志は抗日統一戦線を提起した時それを否定し党の純粹性を守ろうという閉鎖主義と徹底して闘った。閉鎖主義は党の純粹性を守るものでもなんでもなく逆に小スル思想だった。この悲劇の階級的位置はそのような小スル思想をプロレタリア階級性で克服できなかつたことにある。小スルのスタ供に対する憤激がマルクス・レーニン主義思想で組織されたのではなく、銃を媒介にして小スル思想の泥沼にはまりこんでしまつたのだ。だからこの悲劇は今までの我々の革命運動の小スル性をえぐり出し、その終焉を意味している。にも拘らずそれは（上野元も言うように）小スルの憤激をもって強烈にスタ供の〈反動の嵐〉を告発している。そのように階級的位置を見抜かないならば、まさしく《右も左も眞暗闇》となり虚無と絶望の沼と森をさまよわねばならなくなるだろう。

③革命兵士=赤軍兵士の立場について（この項紙数がないので略。一言、上野元の「革命家の条件」に賛成

する。)

④革命の軍隊の建設について。「三種の軍隊」といふことがよく言われる。上野元も言っている。だが僕はこれで「三種の軍隊」についてよくわかっていないかったとか、個人的資信の問題に還元することは全く誤りだと思う。問題はより深いと思う。僕自身答えがある訳ではない。とにかく整理していく。みよう。(先きに政治・組織路線の問題が根源であると書いたが、ここでは核心的な組織路線上の建軍について簡単にまとめてみよう)菩薩の総括から花園元はドブレに依拠しつつ「ゲリラ・ゲリラ戦」を主張した。それはドブレのゲリラ＝生成しつつある党として、従来の政府指導部という党から脱皮し、党的位置の進歩を自らものとして画期的なものであり、ボサツ型の前段階蜂起の非現実性に対するゲリラ戦の提起とあいまって非常に魅力的であり、蜂起主義という小アル競争性の克服に有益なものであった。一方塩見議長は新たに現代帝国主義論構築の作業に着手しつつ、世界一日本革命戦争の外崎段階論から持久戦戦略を打ち出し、花園元やボサツの獄中同志たちの意見をまとめ、対峙的持久的ゲリラ戦戦略を提出しその核に「軍の印の党・党的軍化」とした。それはドブレ主義の批判もふまえを語られていた。「ドブレによるカストロ主義の歪曲＝ドブレ主義は軍の中の党的意義を誤解し、党＝軍化し、軍の絶対化や黒政府主義的傾向を許容し、農民や、都市アロレタリヤートとの統一の問題を見落してい

る点にある。カストロは軍の中の党＝7・26グループを中心として新しい軍と結合し、軍を統合し農民対策、都市対策を卓越した天才的軍事指導とともに隙間なく展開していること」(序章ノウ塩見論文)こういう獄中の同志の意見に対して我々獄外の者は6月敗北以降党组织の組織的後退、綱領論争の拡散化、建軍方針の模索を続けるなか、7年秋前段階蜂起は自然発生し、機關紙「赤軍NO.6」が出された。それは主に階級情勢が対峙段階になったのだという経験的見地からの主張から、持久戦戦略と連続的・攻勢的蜂起という従来と全く同様の主張であったのだが、綱領論争の総括という形での社会主義運動論二重権力論と階級形成、党形成の一元論の極限化、CC=軍団長会議の復活という組織の整備をもって路線転換とした。具体的には戦闘部隊と予備部隊とR.AFの蜂起宣伝隊という形であったが、（戦闘・工作・兵站）は結合しようという方針であった。機關紙「NO.7」はマリゲーラを吸収した結果、基調としては持久的ゲリラ戦があった。「NO.7」は建軍に対し、真正面からとりくんだ意欲的なものである。それは毛沢東同志の井岡山における建軍とマリゲーラのサンパウロ党支部から都市ゲリラへの再編を学び、「党が軍を創り、軍が党を創る」に象徴される路線を獲得しようとしていた。今ふりかえって非常に残念に思うことは、井岡山の建軍から「新兵に対してその小アル性をいかに克服するのか？」を導いたのはよいが、同時に「新兵同様、吉多兵、指導部のもつ小アル性

官僚性を克服し、プロレタリア階級性、党性を発展させるにはどうするか」という問題を全面的にとり上げ深めるべきだったということだ。僕らの間にはそういう問題意識があつたが、それを結局はあいまいにしたことが、大事なおばらしい同志たちを死なせるというこんな悲劇を生んだのだと思うとくやしくてならない。そして12・18の闇いがあり、そのインパクトによる内部論争の反動として「特別号」が出され、年峰起という蜂起主義へのまい戻り（政治過程論の復活）混乱を深めた。しかし彼らのなかから「戦うことによって建軍ある」というゲリラ主義が敵との攻防（われわれはその頃極度においつめられていた）の実践感覚から成長しつゝを媒介に一連のM作戦が展開された。確かにそれは「党の軍化・軍の党化」をもって前哨的ゲリラ戦を切り拓いたと評価できること、建軍武闘を開始したといえる。だが「党の軍化」それ自身では閉鎖主義の追認でしかなかったのだ。党の軍化は「軍の党化」即ち、革命軍として戦闘だけでなく人民の組織者、宣伝隊というものに成長しないなら革命軍の化物になってしまふ。「党と軍と人民」を結合する形態・方法は何か?「軍の党化」の一つの具体的形態として「三種の軍隊」がある。しかしそれは未だ技術的側面から主張されているにすぎない。また過渡期綱領、過渡的闘争がいわれている。それらは三種の軍隊を媒介にする戦術。政策ではあるが、それだけではダイナミックな運動をかちることはできない。また日本ではウルクヤ

のトゥパマロスのような非公然組織一元化ではありえない。フランス「プロレタリア左派」の民兵作戦が運動構造として教訓を与えている。――

今の僕には結論はない。最後の最も大事なところにきてはしまった。こんな簡単に書いて誤解をうけるかもしれない。何らかの形で体系的にまとめるつもりです。ここでは同志森を敬愛している一末軍兵士の悲劇に対する基本的うけとめ方を知って参考にしてもらえばそれでよいと考えます。この悲劇に対して「反革命」とか「暴虐」とかののしることは簡単です。嘆くことは簡単です。しかしそれは革命兵士の任務ではありません。獄中にいる僕は日々、敵と戦っている外の同志たちの苦難から離れており、いかに独房で気が狂いそうな思いをしても外の同志たちの苦難の比ではないと思います。しかし僕は人民の勝利を確信しています。この悲劇にハブル的に対応する人はけっして克服しえないがプロレタリア階級性に立脚する人はみごとに成長するのだと思います。救援組織の皆さん、困難ななか弁護士の皆さん同志たち、友人たち、がんばって下さい。

3月30日夜

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

—補(「---若干の意見」についての修正)—

僕は当初、悲劇的な事態に対する精算主義と教条主義に（とりわけ精算主義）対してどうしても批判しておかねばならないと思って「---若干の意見」を書き、「悲劇の根源」に対する卑俗的な矮少な見解を批判しました。

その批判は原則的には正しいのですが、具体的には問題を曖昧にするような主張だったと思っています。それは主に「統一赤軍の合同」と「同志森ら指導部の問題」です。

①統一赤軍の合同について（統一戦線問題） この問題についての反省は直接には革命左派の川島豪氏らの3・31声明を読んで強烈に統一戦線のあり方の深刻さを感じとったからです。いずれにせよ日本社会主义革命戦争においての地下武装統一戦線の問題は戦略的問題としてとり扱わねばなりません。連合赤軍から統一赤軍（統一党）へ發展せんとしたとき悲劇がおきたということはいかに分析しようとも統一赤軍のあり方を分析せざるをえないのです。川島豪氏らの「政治路線をもって軍事（路線）を統帥しなかったがゆえの破産」という主張は正しいがその内容として「反米愛国でなかった」とすることや、あるいは壇見議長のように「反米愛国＝左翼盲動主義」とし、それと乖離したところで規律問題を分析するというような「政治」でバッサリ切ることに僕は反対します。政治路線の相違する二つの武装GTRが合同したが故に破産したというのは正しいだろうと思っています。しかし僕は組織的側面から見えないと見え切れないと思っています。革命武装勢力の統一戦線の勝利と敗北の歴史は数限りなくあります。悲劇としてはスペイン内乱時、フランコの進撃の最中、スターリニスト党に大量しゃく清、テロされたPOUM、中国北伐戦争途上27年の国民

党による共産党に対するクーデタ収清、これらは敗北です。（しかしこれらは独自武装勢力同志の統一戦線ではなく、加入戦術だった）キューバではカストロたちが、都市部学生革命GTRや地方ボス的GTRとの統一戦線に苦労していたと思う。ラミルのC.マリゲーラはMR8(?)との戦闘上の共闘で何度か作戦を成功させている。朝鮮の金日成将軍は30年代半ば国内光復会の手口入れと同時に中国東北部の「朝鮮革命軍」のグループを合流させていた。カストロにしても金日成将軍にしても合流したグループがなんらかの形で後に問題をおこしているのではないかと思う。しかし金日成将軍は殆んど異質の武装部隊と共に闘する場合でも戦場と日常において最大の同志愛と保護をもって対話し團結をかちとっている（民族主義者、獨立軍や反日救國隊らとの團結、33年9月の東寧県城進攻の勝利等）これは大いに学ぶべきことだ。僕たちは基本的に小ヌル政党、GTRに対しては「連合もすれば闘争もある」方針を、革命戦争グループに対しては「團結一批判一團結」の方針で統一戦線をくむべきだろう。しかし具体的な運用に関しては前者では「道理、節度、時機」を重んじておかねばならないし、革命戦争グループに対しても「合流」に関しては慎重であらねばならない。僕は「大量処刑」という悲劇の根源を一概に「合流」に帰することは賛成しない。しかし中途半端な新党組織であつたが故に、その團結と規律性を保持するために最悪の手段＝脱落者処刑となつたというのは全く正しい見解

について論じようとする人々は党組織に対する一定の立場を前提にしてしか論じることはできない。アルジョアジーは、革命党を破壊しようとする立場から反共キャンペーンを行っているのであって我々は革命党を建設しつつある立場からこれに対処している。

——アルジョアジーのキャンペーン—— —— アルジョアジーのキャンペーンは連合赤軍の銃撃戦が「革命戦争ではない」とこと「政治闘争の本流ははずれている」とことを懸念に強調したがこのことはアルジョアジーが革命戦争の發展を死ぬほど恐れており、現在の階級情勢は革命戦争への労働者階級人民の決起に必ずつながる見えないことを階級的本能で察知し連合赤軍及び我々を政治勢力として認める見えなくなっていることを告白するものであった。商業新聞による銃撃戦についてのアンケートでは「心情的にわかる」という比率が11%にも上ったのである。(これは67年10・8羽田闘争のあの比率と同じである) --- 中略(曰共や新左翼運動分子への批判)
このことは日本革命戦争の未来は全く明るいことを示しているのである。「冬の時代」などという言葉は急進民主主義者、革命戦争に対して動搖している者、合法主義者の言うことである。労働者階級人民の、アルジョアジーに対する怒りと憎しみはどこまでもそこを知らずに至るところで爆発している。この階級的憤激の波は必然で革命戦争の大波にまで高まってゆくであろう。我々共産共義者同盟(RG)は連合赤軍を越えて進む。

アンケート集計

現在、全世界の情勢は天下大動乱の様を示し、新左翼革命派を志す我々にとっても、認証が現状の変化に決定的にたちおかれていることを痛感します。そんな中で救援会が、革命の大后方としての役割を十分に担うためには、状況の変化に対して正しく判断し、革命の方針を誤ることなく活動しなければなりません。人民救援会では、情セイ把握の手段として、3月中旬から、アンケートという形での意証調査を行いました。対象は人救ニュース講読者300名と我々が接しているごく一部の人有限しましたので、社会的には非常に狭い範囲です。社会一般の傾向を我々独自で調査する力量もなく、意証の動向を調査すると同時に、個人の経歴・年令などによる意証傾向の変化を知り、さらにどのよくな系統性と関連性があるか、という点に主眼をおきました。内容は、米中会談・連合赤軍という現代の象徴的な2つのでき事と日本のこれからに關して、これらの事件に対するかかわり方で、ある程度、現象的に知ることができるのでないか、と思つたためです。実際にはじめてみると、設問のしかたが悪いという批判をかなり受けました。たしかに思いつき的な面も多く、設問の際分析をする時の事をあまり考えに入れずに作ってしまいました。我々のアンケートに対する態度の不テッティさを深く反省しています。それに加えて、アンケートの意図の説明が不充分であり、ニュース講読者と人救との関係の希薄さも原因して、発送数の約1割33名という少ない回収率でした。したがって、社会的傾向の資料にはなりませんが、我々の身近な人々の意見という意味ならば、参考になる問題を含んでいふと考えます。この数少ない中においてさえも、個人の思考傾向は特徴的であり、付された意見も貴重で、今後の活動の上で、我々のなすべき事を提起してい

るようです。そういうことを確認した上でお読み下されば
皆様方の何うかの参考になることはできうだらうと思ひます。

◎ 解答者のうちわけ

総数は33名、うち30才以下(18才以上30才まで)27名、
40才以上60才までが6名でした。職業では、学生が11名・労
働者が14名(ホワイトカラー 5名・ブルーカラー 9名)
主婦4名、その他(ルシプロ・自由業など)4名。活動経験の
ある人は19名、ない人は11名、どちらともいえないが3名
でした。

◎ 総計: 結果

アンケートは、複数解答制ですので、総計は人数ではなく
解答数でいたしました。()内は総数です。

A. 米中会談について

	30以下 (32)	40以上 (10)	合計 (42)
1. ニクソンはアジアの革命斗争を 押さえきれなくなつて行つた。	16	2	18
2. テレビで中国のようすを知るこ とができるよかったです。	5	3	8
3. 米・ソの均衡を破るために行な た。	2	2	4
4. ベトナム人民への裏切りである。	4	3	7
5. わからない	5	0	5

B. 連合赤軍について

	<33>	(9)	(42)
1. 敵と銃で斗う思想は正しい。	12	2	14
2. 敵と銃で斗う思想は正しいが、 時期が早すぎた。	5	0	5
3. 弹圧をまぬいただけで、日本で は銃をとることはできない。	5	2	7

	(33)	(9)	(42)
4. 浅間山荘まで気持はわかゝたが リンチは正しくない。	5	3	8
5. 東大斗争までは支持できただが、 最近のバクダンや連合赤軍などは 支持できなくなつた。	2	2	4
6. わからぬ。	4	0	4
C. 日本のこれから	(27)	(6)	(33)
1. 軍国主義をして危険な侵略国になる	19	3	22
2. わからぬ日本がばくせんとして不安全 感じる。	6	3	9
3. 痛れ国家になり平和が遠く わからぬ	0	0	0
	2	0	2
	(27)	(6)	(33)
4. 社会党・共産党などは権力をとれば よい。	0	3	3
5. 革命をやるべきだ。	15	1	16
6. なんともいえない。	12	2	14

以上のような結果になりました。

上にあげた資料では、個人の経歴との関連性、持られている種々な意見をお知らせすることはできませんが、末に、わが社やまい集計方法を探っている段階ですので、今後、皆様のご批判をうけながら、人數とこの集計報告をまとめ、発表していきたいと思います。又、今回の調査をきっかけとして、より幅広く、より深く、問題を考え、現状を認証する作業を行なっていくつもりです。

尚、詳しい報告に関しては、次号の人材ニュースに掲載いたします。

定価 50 円

千代田区神田神保町1-27 松屋ビル内
(291)4450

人民救援会